

単語ディクテーション教材試作

DEVELOPING CALL MATERIAL FOR KATAKANA WORD DICTATION

桑原陽子 KUWABARA Yoko (福井大学留学生センター)

中園博美 NAKASONO Hiromi (島根大学外国語教育センター)

敷田紀子 SHIKITA Noriko (福井大学留学生センター)

要旨 カタカナ語の表記定着のため「Katakana Dictation かいてみよう」を作成した。カタカナ語は上級学習者でも定着が不十分であり、本教材は初級から上級までの学習者を対象としている。初級学習者と上級学習者計 29 名に試用を依頼し、本教材に対するコメントと学習履歴を収集した。本研究では、学習終了後のアンケート結果と、学習履歴データ中の誤答及び機能ボタンの使用状況の分析を行った。誤答分析からは、本教材の問題点及び改訂の必要が示唆された。また、voice、check、hint、correct answer の 4 つのボタンの使用状況から学習者のタイプ分けを試みた。

キーワード カタカナ語 ディクテーション 誤答分析 学習履歴

1. 教材の概要と試用方法

「Katakana Dictation かいてみよう」は、カタカナ語の表記定着を目指して作成された CALL 教材である (桑原・敷田・趙, 2006)。教材の概要は次の通りである。【対象】初級～上級【学習材料】「みんなの日本語初級」1 のカタカナ語 113 語。4 つの Lesson から成り 1 Lesson 約 30 語。【学習方法】画面上の voice ボタンをクリックし、カタカナ語の音声を聞く。その単語を画面上の文字パネルを使って表記する。check ボタンによって回答が正しいかどうか確認し、正答の場合のみ次の問題に進む。英語翻訳語を見るための hint ボタンと正答を見るための correct answer ボタンを設置した。Lesson の最後に学習履歴が表示され、必要に応じて印刷できる。

本教材の試用は、次のように実施した。【時期】2007 年 2 月～3 月【協力者】日本の大学で学ぶ初級日本語学習者 15 名、上級学習者 14 名。【方法】上級学習者 3 名以外、調査者立会いのもと本教材でカタカナ語を学習した。疲労による学習効率低下を防ぐため 1 回の学習を 1 Lesson とし、次の学習は約 1 週間後に行った。全員少なくとも Lesson 2 まで学習し、可能な場合は Lesson 4 まで学習した。全学習終了後アンケートを行った。

2. アンケート結果

アンケート調査結果を以下にまとめる。分析対象は初級 15 名、上級 12 名である。

Table. 1 教材に対する評価 (%)

上段：初級(N=15) 下段：上級(N=12)	非常に 賛成	賛成	どちらとも 言えない	反対	全く 反対
1) カタカナ語の勉強に役に立つ	60.0 41.7	33.3 50.0	6.6 0	0 8.3	0 0
2) カタカナ語の正しいつづりを覚えるのに役に立つ	53.3 33.3	33.3 50.0	13.3 16.7	0 0	0 0

3) カタカナ語の発音を覚えるのに役に立つ	60.0	26.7	6.7	6.7	0
	41.7	58.3	0	0	0
4) カタカナ語の意味を覚えるのに役に立つ	46.7	13.3	20.0	13.3	6.7
	16.7	25.0	41.7	16.7	0
5) 教材の使い方はわかりやすい	53.3	26.7	20.0	0	0
	33.3	50.0	16.7	0	0
6) 音声は明瞭で聞きやすい	46.7	40.0	13.3	0	0
	8.3	50.0	41.7	0	0
7) Lesson ごとにまとめのテストがあったほうがよい	40.0	33.3	13.3	6.7	6.7
	16.7	41.7	25.0	8.3	8.3
8) 1つの Lesson の問題数が多すぎる	0	6.7	13.3	46.7	33.3
	0	0	41.7	33.3	25.0
9) 楽しく勉強できる	40.0	33.3	20.0	6.7	0
	16.7	50.0	33.3	0	0
10) この教材の問題は難しい	0	6.6	26.7	26.7	40.0
	0	0	33.3	33.3	33.3

肯定的な評価が得られた。特に、発音とつづりの学習に役立つという回答が多く、教材の目的は達せられたと言える。

Table. 2 カタカナ語の勉強について (%)

上段：初級(N=15) 下段：上級(N=12)	非常に賛成	賛成	どちらとも言えない	反対	全く反対
1) カタカナ語のつづりを覚えるのは難しい	26.7	6.7	53.3	13.3	0
	16.7	20.0	41.7	16.7	0
2) カタカナ語の発音を覚えるのは難しい	13.3	26.7	40.0	20.0	0
	8.3	41.7	8.3	41.7	0
3) カタカナ語の意味を覚えるのは難しい	6.7	13.3	20.0	53.3	6.7
	16.7	16.7	50.0	0	16.7
4) カタカナ語を体系的に勉強することは大切だ	33.3	40.0	26.7	0	0
	25.0	41.7	33.3	0	0

カタカナ語学習の重要性は強く認識されている。カタカナ学習の困難さは個人差が大きい。意味の学習は、上級学習者よりも初級学習者のほうが困難さを感じていない傾向が見られるが、これは初級学習者の既習単語が比較的容易なものであることに起因するのではないだろうか。

Table. 3 カタカナ語の勉強方法について (%)

上段：初級(N=15) 下段：上級(N=12)	よく使う	使う	いくらか使う	あまり使わない	ほとんど使わない
1) 1語ずつ書いて覚える	13.3	13.3	40.0	13.3	13.3
	16.7	25.0	25.0	33.3	0
2) 1語ずつ発音して覚える	20.0	60.0	13.3	0	6.7
	8.3	25.0	50.0	8.3	8.3
3) 英語などもとの単語と関連づけて覚える	40.0	13.3	33.3	6.7	6.7
	33.3	50.0	0	0	16.7
4) 英語のつづりとカタカナ表記の間の法則を見つける	26.7	33.3	20.0	6.7	13.3
	33.3	25.0	25.0	8.3	8.3

非常に個人差が大きいと言えるだろう。しかし、上級学習者は、「書いて覚える」「発音して覚える」等の機械的な繰り返し練習が初級学習者よりも減少し、「英語のつづりとカタカナ表記の間の法則を見つける」のように体系的な学習を行う傾向が見られる。

3. 学習履歴の分析

学習履歴には、voice、check、hint、correct answer の各クリック数、学習所要時間、誤答がすべて記録される。本稿では、誤答と各ボタンのクリック数について分析を行う。

3.1 誤答分析

誤答の履歴から、①多くの学習者に共通する誤答、②その誤りの種類、③不正解後の解答方略、について考察を試みた。初級学習者の半数及び上級学習者の3分の1以上に、1回以上誤答が見られた語は、「エンジニア」「テープレコーダー」「ネクタイ」「フォーク」「ジャズ」「サンドイッチ」だった。誤りの傾向を見るため、各語中で誤りの多かった部分を抽出した（*は誤りを示す）。

<u>エンジニア</u>	「ジ」→*「ヅ」 「ニア」→*「ニア」*「ニア」
<u>テープレコーダー</u>	「テープ」→*「テプ」 「レコーダー」→*「レコーダ」*「レコーター」*「レコダー」
<u>ネクタイ</u>	「ネク」→*「ネック」 「タイ」→*「ダイ」
<u>フォーク</u>	「フォー」→*「ポー」*「フォ」
<u>ジャズ</u>	「ジャ」→*「ジャー」 「ズ」→*「ス」
<u>サンドイッチ</u>	「イッチ」→*「イチ」*「ウィチ」

これらの結果から、長音、促音の有無とその位置、清音・濁音の区別、f音の書き取りにおいて問題点が見られると言えそうだ。また、エンジニアの「ジ」を*「ヅ」と解答しているのは、パネル上の文字の認識ミスによる誤答と思われる。この種の誤りと思われるものは初級学習者に多く見られ、「フィルム」の「フ」を*「ワ」、「サンドイッチ」の「ン」を*「ソ」としている誤答もおそらく同じ原因によるものだろう。

カタカナ語は表記と発音の間のずれ、表記にゆれがあるものがある。「レコーダー」は「レコーダ」と表記されることもあるが、本教材は発音通りの表記のみを正解としている。この点は再考が必要かもしれない。同様の例として、Lesson1の「コンピューター」は、上級学習者の誤答がすべて「コンピュータ」であった。発音と異なっても慣用に応じた表記であれば、正解と認めるほうが現実の使用実態に合うと思われる。

不正解後の解答履歴を見ると、誤答に長音を挿入したり削除したりして次の解答を試すものが多かった（例：カラオケ→カラーオケ→カラーオーケ→カラオーケ→カラオケ→カラオケ（正答））。他には、促音の挿入・削除、清音・濁音・半濁音を入れ替えて解答を試すものが目立った（例：テプレコーダー→テップレコーダー→テップレコーダ→テップレコーダー→テブレコーダー→テブレコーダー→テップレコーダー→テップレコーダー（正答））また、本教材では語の途中だけを修正することができないため、上の「カラオケ」の1つ目と5つ目のように、何度も同じ間違いをするケースも頻繁に見られた。この点から、効果的なフィードバックのあり方を再考する必要も示唆された。

3.2 ボタンのクリック数の分析

学習履歴から、Lesson1 と Lesson2 の各ボタンのクリック数を初級、上級ごとに集計したところ、初級、上級の間でボタンの使用回数に大きな違いは見られず、個人差が大きいことが示された。そこで、「答えが不正解だった場合、次にどうするか」に注目し、個々の学習者の学習過程を考察する。

答えが不正解の場合、学習者のとる行動は次の3つである。①音声を聞く②別の答えを書く③正答或いはヒントを見る。それぞれの傾向が強い学習者として①タイプ E4、E14、②タイプ E10、A12、③タイプ E8、A9 を選び、具体的に見ていくことにする。E は初級学習者、A は上級学習者を示す。Lesson1 と Lesson2 のデータのみ Table. 4 に示す。

Table. 4 Lesson1 と Lesson2 のエラー後に使用するボタン

学習者	Lesson 1					Lesson2				
	エラー回数	エラー後に使用するボタンの割合				エラー回数	エラー後に使用するボタンの割合			
		voice	check	hint	correct answer		voice	check	hint	correct answer
E4	14	92.9	7.1	0	0	39	64.1	35.9	0	0
E14	37	54.1	45.9	0	0	21	66.7	28.6	4.8	0
E10	17	0.0	82.4	5.9	11.8	28	3.6	71.4	14.3	10.7
A12	24	29.2	54.2	0	16.7	18	16.7	55.6	0	27.8
E8	20	30.0	50.0	10.0	10.0	15	20.0	20.0	13.3	46.7
A9	15	6.7	40.0	13.3	40.0	16	0	37.5	6.3	56.3

E4 は voice ボタンを使用する回数が多く、特に Lesson1 ではほとんどの場合すぐに音声を聞きなおしている (92.9%)。Lesson2 は 64.1% だが、Lesson3 は 88.8% である。E14 も voice を使用する割合が高く、Lesson1 から Lesson3 まで常に 5 割以上である。2 人とも初級学習者だが、上級学習者にもこのように音声の聞きなおしが多いタイプは見られる。それに対し、E10、A12 は音声を聞かず、すぐに別の答えを再入力する傾向がある。おそらく、単語の意味を理解しており、自分の記憶に頼って回答しようとしているのであろう。このように、音声を聞く回数が少ない者、E10 のように一度も音声を聞きなおさない者は他にも見られた。一方、E8 と A9 は correct answer の使用が比較的多い。特に A9 は、正答が得られなかった場合の約半数はすぐに正答を見ており、自力で答えを出そうとしていない。2 人のアンケートを見ると、本教材を全く難しいとは感じておらず、「この教材はカタカナ語のつづりを覚えるのに役に立つ」に対して、全体の中では低い評価である「どちらとも言えない」と回答している。本教材が表記定着にそれほど効果がないと考えていることが、すぐに正答を見ることにつながっているのかもしれない。このように機能ボタンの使用から学習者のタイプが見えるが、さらに 3.1 で述べた誤答の種類と結び付けて分析すれば、より詳細に学習過程が見えてくると考える。

引用文献

桑原陽子・敷田紀子・趙曉妮, CALL 教材開発の試みーカタカナ語練習用教材、音声聞き取り教材の作成報告ー, 福井大学留学生センター紀要, vol. 2, 1-10, 2006